

平成27年度 副知事と県民の意見交換会概要

テーマ：森林資源を有効活用した地域活性化 ～循環型社会の構築に向けて～

日時：平成27年7月17日（金）14：00～16：30

場所：羽後町西馬音内盆踊り会館

(副知事あいさつ)

昨年5月、羽後町を訪れた際、1時間ほどかけて街中を散策したが、趣もありとてもよい雰囲気
の街という印象を持った。近年、古民家が海外からクールジャパンの素材として脚光を浴びており、羽
後が観光資源として大きな魅力を秘めていると感じたところ。

角館の武家屋敷、増田の商家の内蔵、そして羽後には古民家と、これらを巡る旅は、これからの秋
田全体の観光を考える上で大きな魅力ある素材の組み合わせ。羽後町長ともどもうまく活用してい
きたいと考えている。

さて、今日のテーマは森づくり。湯沢雄勝は県内でも有数の山林資源に恵まれ、全国森林組合連合会
会長は湯沢市の方でもある。秋田を挙げて日本一の森林県、あるいは木材産業の中心となってほしい地
域でもある。こうした我々の思いを受け止めていただきながら、今日はよろしくお願ひしたい。

※同会場にて、羽後高校生徒による循環型社会の可能性に関する学習活動発表を見学。

【参加者自己紹介】

(A氏)

ペレット事業を2年前から手がけている。この地域でお金を回し、地域の活性化につなげていき
たいと思っている。

(B氏)

赴任して11年目。現在はボランティア部と生徒会を担当し、進路指導主事でもある。県民参加の森
づくり事業を活用した講演会、町有林への植樹活動、地元小学生との植樹体験などさまざまな森林活
動に携わっている。

林業大学校には昨年度女子生徒が1名、今年度も希望者が1名と林業関係に進む生徒が出てきて
いる。地元に残りたいという生徒も多い。7月1日から求人票が公開され、進路活動に力を入
れている時期でもある。今日の意見交換を、今後の進路活動等にもつなげていきたい。

(C氏)

湯沢市内2,000社のうち、主に小規模事業所を回って求人や採用の際のサポートをしている。7月
1日から高卒求人が公開されたばかりだが、小規模事業所においては採用がなかなか厳しい状
況にある。今日は、日ごろと違う分野の方のお話を聞けることに期待している。

(D氏)

東成瀬村は広大な村有林を抱え、大規模森林所有者という立場でも行政運営に携わっている。間伐も

しくは主伐の適齢期に達した樹木が多くなっており、これらの活用の仕方も課題。今日の意見交換を通して、今後の村政に生かしていきたい。

(E氏)

羽後町地区担当として森林所有者に事業を提案し、仕事を取りつける業務を行っている。そのほか、羽後高校や元西小とタイアップし年一回ずつ植樹活動も行っている。

(F氏)

森林関係となると女性部にはなかなかなじみが薄いため、まずは会員同士の交流をメインに活動している。

(G氏)

3工場（八橋、土崎、湯沢）の責任者である。病院やホテルの寝具をリースし洗濯するリネンサプライ業を行っている。洗濯後の乾燥に、湯沢工場においては今春から化石燃料からバイオマスボイラーに切り替え稼働しているが、今のところ特にトラブルもなく順調な稼働状況。CO₂の削減につながる取組をしていきたい。

(H氏)

素材生産から木材チップ生産まで一貫した生産体制を構築している。林地残材を積極的に搬出し、製紙用チップにして加工販売している。燃料用チップの工場も建設予定。

【意見交換】

(A氏)

ペレット事業を始めたきっかけは、日本のエネルギー自給率が低いこと。燃料を海外から調達している現状を、幾らかでも地元の会社等に回せば地元でお金が循環するのではないか、という発想からである。調べたところ、横手市と湯沢市雄勝郡合わせて1シーズン約77億円の灯油を消費していた。仮にこの半分でもペレットで賄えれば、その分の燃料代が地域に回り、その経済効果はその倍になる。人口減少で危機的な状況にある当地域を、こうした取組で少しでも食い止められるのではないかと。

日ごろ、高校生と触れ合う機会も多い。高校生が地元で面白さを感じないと県外に出てしまうばかりだと思う。若者には地元にもっと良いところがあることを伝えていきたい。

(B氏)

秋田魁新報社からは、「一つの企業と連携して地域の活性化につなげられるようなテーマ」で発表して欲しいとのことで「湯沢地域活性化高校生選手権」に臨んだ。

日ごろ進路指導担当として感じるのは、「生徒は地域が大好き、家族も好きで、地元に残りたい。けれども、就職しようにも受け皿が少ない。」という現状。

たまたま、羽後町の「人口減少対策プロジェクト」に生徒が参加。このなかで、羽後町のよいところ（＝自然が豊か、食べ物が美味しい）と、改善したい部分（＝遊ぶところが少なく、若い人の娯楽の場がない）が明確になり、ここに「自然を活かした雇用創出」という小野建設の発想、循環型社会への取組とが繋がった。

「東北最大級のコテージ村」のアイデアは、羽後町に建設予定の道の駅ワークショップ参加などを経

て、高校生としてのまちづくりの提案でもある。

(F氏)

ペレットストーブに興味を抱いたのはだいぶ前。盛岡でペレットストーブを見たのがきっかけ。当時、自宅では重い薪を使用した薪ストーブを使っていたが、小型のペレットの方が扱いやすく、なにより火が見える暖かさがよいと感じた。

その後もさまざまところで見る機会があったが、ペレットの製造や運搬等の問題が進まず、あまり普及しなかった。近年は当時より一歩前進したため、今後は家庭でも普及していけばよいと思っている。

(H氏)

地域内で経済を循環させるという、羽後高校の発表は素晴らしかった。

現在、製紙用チップを生産しているが、生産過程でダストやバーク（樹皮）が排出される。バークは製紙業者に燃料用として、ダストは畜産業者に引き取ってもらう。このように、木は廃棄するところがなく全て利用できる素晴らしいもの。

森林資源をさらに有効利用したいという思いで立ち上げるのが、間もなく横手市に建設する発電用チップの生産工場。未利用材を搬出する専門チームを作る予定である。

(C氏)

最近、「里山資本主義」をテーマにした本を読み、里山資源の有効活用が地域活性化に結びつくという考え方に大きな興味を持った。

岡山県真庭市では、スギ集成材を組み合わせて六階建ての木造建築をつくる会社が、製材段階で大量に発生する廃棄材を活用し発電しているという事例。また、北海道の下川町では、町有林の木材を有効利用することで化石燃料から転換し、その熱源を各家庭の給湯器に使用する事例が紹介されている。こうした全国各地の事例に刺激され、最近、関連した話にアンテナが高くなっている。

流通事情も変化し、どこの地域も会社も、他への転換を迫られる時代。地元商店はいつも模索を続けている。森林資源の活用は、行政挙げて取り組んでいるところ、企業としての取組などさまざまだが、もっといろいろな人がいろいろな取組手法を学べるとよい。

そうした意味において羽後高校の発表は的を射ていて、大人でも思いつかない素晴らしい発表だった。コテージ村の発想などは、若者にとっても魅力がある。

最近市内の新築住宅でも薪ストーブの家が増えているように感じる。田舎らしくてこれも良いと感じる。ますます、この分野にあこがれを感じる。

(D氏)

羽後高校の発表は、単なる提案ではなく、課題を押さえた素晴らしい発表だった。実際、行政職員の立場でこの循環サイクルを考える場合、現状の弱い部分にも目を向ける必要がある。この地域での課題としては、ペレットストーブを使う環境がまだまだ弱い。

東成瀬村が導入促進事業で集会所等に設置したペレットストーブは、近場にペレット購入場所がないのがネック。より気軽に購入できるようになればもっと普及するのではと期待する。

村では、秋田県水と緑の森づくり税事業を活用し、毎年森林体験教室を実施している。実施メニューはブナの植栽、下刈り体験、伐採、枝打ち体験など。子供たちが林業に触れ、地元には素晴らしい資源が多くあることを肌で感じる取組である。

地元に残りたい子供も多くいるはず。過去に教室に参加した子供たちも高校や大学を卒業し、地元に残るかどうか選択を迫られる年齢にさしかかっているが、こうした取組を通して、地元の素晴らしさに気付き一人でも多く残ってもらいたいと願っている。

(G氏)

羽後高校の発表は、循環型社会や人口減少の問題まで踏み込んだ、素晴らしい内容だった。

木質バイオマスボイラーについては、平成25年3月に秋田市土崎工場で、また、今年の3月には湯沢工場で稼働させている。

土崎工場では、重油使用量80^{キログラム}／月が、現在の使用量はゼロ。現在は全てを木質バイオマスに転換している。湯沢工場はこれより規模が幾らか小さめ。以前の重油使用量45^{キログラム}／月だったものが、現在はほとんど使用せず済んでいる。

バイオマス燃料への転換に取り組んだ理由は、経営の効率化。化石燃料は価格の変動が大きく、一時2倍近くまで価格が跳ね上がって経営を圧迫した時期があった。木質バイオマスへの切替により、価格の平準化を図ることができる。

また、社長が以前木材製材会社を経営していた経験から、木質バイオマスへの転換に強い信念があったこと、このほか、東日本大震災時に燃料調達に苦慮した経緯などから、複数の燃料ルートを持ちたかったという理由もある。

現在、化石燃料の価格が下がってきており、カロリー換算での比較においては木質バイオマスの方がやや割高という状況になっているが、会社としてはCO₂削減及び地域林業、木材産業の振興に貢献したいという思いで、これからも積極的に木質バイオマスを使用していきたい。

(E氏)

現在、高校生らを対象に植樹しているのは、羽後町の登川堤地区内の羽後町有林。

ここで植樹を始めたのは、県外業者が100^本ほどを皆伐したのち、植栽せずに放置された経緯から。植栽を目的に森林組合が山林を買い取り、その後毎年100～150本ずつ植樹し、現在の植樹累計は1,000本を超えた。

元西小学校4～6年生を対象に植樹活動を行っているが、地元に住んでいても、こうした植樹体験はなかなか出来ない。植樹体験を通じて、小学生や高校生が将来、林業関係の仕事に従事することを期待している。

伐採後の植栽数は少ないのが現状。近年は、国有林においても、搬出から再造林まで一貫したシステムで行い、低コスト化を目指す取組が進められている。この地域でも取組を進め、再造林面積を拡大していきたい。

(副知事)

今年4月に林業大学校が開学。林業への新規就業者は毎年140名ほどとコンスタントにいて、近年は林業が就業先として復活したという手応えを感じるなか、よりこの動きを強めようという考えから開学した。

私も林業大学校で講義を行っているが、今年度入学生18名のうち雄勝地域から4名入学するなど、比較的県南の割合が多いと感じている。

東日本大震災を経て、東北を日本の緑の拠点として再生することの重要性を国に対して訴えてきた。こうした声が届き、森林整備のためには間伐を進めること、間伐のためには作業道整備が必要だとして、

国でも森林整備に対する事業予算は以前より相当大きく増えている。

経済循環の中で森林を守るには、木材需要を増やす必要がある。羽後高校が着目したのは、地球全体の温暖化対策の取組、環境循環と経済循環とをリンクさせた点であり、とてもよい視点だと感じた。我々の思いもまさに同じ。

地球環境の保持貢献のあり方、また、秋田の森林あるいは日本の森林環境を守るための具体的な方策、経済活動とどうリンクさせるのかなど、小野建設の取組はまさにこれだと言える。

秋田は製材や合板生産が盛ん。近年は、中小企業が全国に対抗できる大型製材工場を稼働させている。こうしたなかでバイオマス発電は、チップ製造を強化する良い動きにつながると思う。

秋田基準寝具の取組については、今後、イランの原油生産量が回復し原油価格が下がった場合、果たしてバイオマスボイラーでやっていけるかという心配もあるが、企業の経営効率化でもって対応する取組も欠かせないのではと思う。

地域経済や雇用につなげるためにも、地域全体で取り組むことが大事。これが若者の地域への愛着、あるいは地元が面白いという感覚にもつながっていく。こうした循環をいろんな形で実践するために、一緒になってがんばっていききたい。

※同会場にて、東成瀬村の村有林を活用した地域振興策の取組についての発表を見学。

(C氏)

小野建設のペレットストーブ販売はこれから拡がり期待できる。

新潟県燕三条一帯では、キャンプ用品にかかる製造関連業が一大産業化している。

これと同じく、秋田県でもストーブ生産など付加価値の高いものを生産する産業が築けたらよい。先ほどの羽後高校の発表「コテージ村の発想」のように目に見えて面白いものがあれば産業として発展するのではないかと。

県が開学した林業大学校では、林業作業の習得がメインとのことだが、これからの時代、大切なのは林業経営のスキル。森林経営のシステムなどを学ぶカリキュラムが充実するよう、今後を期待している。

(副知事)

東北北海道で初の開校となった林業大学校では、高性能林業機械の習得のほか、森林経営や森林整備など幅広い内容を組み込んでいる。私自身はもう少し定員増を考えていたが。

ウッドファーストという言葉は難しいが、要は安定した森林整備によって経済的な木材施業を行うこと。それには安定した木材需要が不可欠である。

近年は、例えば国際教養大図書館、秋田駅バスターミナルの待合場所などにも積極的に県産材を用いている。駅や学校、商店街など、できるだけ多くの公共施設に県産材を使うためのアイデアを県民の皆様からいただきたい。

(A氏)

ウッドファーストの考えがうまくいくと、都会と田舎が逆転するのではないかと考えている。田舎の地域資源を有効活用し地域内で経済循環すれば、独立してもやっていける。資源がない都会では、これは絶対できないことだと思う。

ウッドファーストを浸透させるには、一企業、一団体の取組だけでは難しい。地域一体にもっと拡がると良い。

(副知事)

県立大学では、附属機関の木材高度加工研究所で木橋を作る計画があるとの話がある。過去に藤里町で木橋を架けたが、コストがかかるため続かなかった経緯がある。一つの取組がうまくいかないと一種のトラウマになって、断念したままとなりがち。今は技術も進歩し、耐久性、耐火性も向上している。行政、学校、住宅建築業者など、それぞれ諦めていた分野に再チャレンジする価値はあると思う。県内のあらゆる団体が、具体的な取組としていけたら、と思う。

(G氏)

秋田工場では平成25年度から燃料を木質バイオマスに切り替えているが、冬場はチップに含まれる水分が凍結し、そのまま投入すると熱量が下がってしまっただ稼働にも影響を与える。

このため当社では、夏場に購入したチップを乾燥させたものや建設廃材を混合するなど工夫している。湯沢工場では焼却した蒸気でチップを乾かす試みをしているが、今のところ十分な効果がでていない。チップの乾燥化に向けて技術的な研究が進むことを期待している。

(副知事)

課題改善に向けていろいろ工夫しないと取組が進まないことも多い。

羽後高校の卒業生で林業関係に就職したとか、関心がある生徒はいないのか。

(B氏)

羽後高校では1年生全員で植樹体験している。高校生は小学生の頃の体験とは異なり、より年齢に近い森林組合の方々と作業を一緒に行うことによって、「職業」としてのイメージが近づくように感じている。

2年前、自ら林業大学校について調べ、長野の林業大学校を受験した生徒がいた。結局、合格できなかったが、秋田に林業大学校ができたことで、林業関係に就職したいと希望する生徒の夢が近づいたように思える。

一つお願いがある。それは林業大学校の定員枠をもっと拡げてほしいということ。

設備や人員など予算上の問題はあることは承知している。来年度は厳しいとしても、数年後には増員できないか。

今年は合格発表日が幾分早まったとはいえ、高倍率がゆえに不合格、次の就職に切替を迫られる、となれば、生徒にとっては厳しく、ハードルの高さに躊躇する生徒もいる。

どうか、専門的な知識を身につけたい、林業に携わりたいという生徒の願いを叶えてほしい。

(H氏)

毎年、高校生の新卒を2名募集しているが、ここ2年間応募者がいない。

会社のアピール不足もあると思い、高校生に会社概要を知ってもらいたく、今年から県南就職面接会に参加することにした。

当社では林業大学校に負けないくらいの研修指導をしていけるので、なんとかお願いしたい。

(E氏)

緑の雇用事業を活用し、平成23年度から延べ25名、研修生15名を受け入れている。

今後、管内の事業体、関係機関と連携を図りながら、この研修受入をPRしていきたい。

(副知事)

山を守るためには林業で森林整備をする必要があるが、林業従事者がいなければどうしようもない。人材確保のためには、もっと積極的にPRしていかなければならない。

(司会)

今年度、振興局では地元企業を知ってもらうための取組として「高校生が地元企業を動画で紹介する事業」を行っている。多くの地元企業に参加協力をお願いしたい。

(副知事)

湯沢雄勝地方は虎毛山、神室山など癒し系のいい山がある。若い人に、山に愛着をもってもらいたい。

(D氏)

林業に従事したい人がいることは心強い反面、当地では冬に雪が多く仕事がないのがネック。建設業においては、冬季除雪のほか、異業種への参入なども必要ではないかと思う。

(副知事)

生活道路、山の維持など、生活に必要な公共的なものの維持に従事することは、一定の共通項がある。建設業に従事する人の確保も難しくなりつつあるし、こうした他分野への参入が必要だ。

(副知事総括)

秋田県はスギ人工林で全国1位を誇る。

新しい時代、地球環境保全という観点においても、森林整備の重要性は一層増してくる。

秋田県、特に湯沢雄勝地域には、秋田が日本全国に貢献できる大きな部分を担ってほしい。

そのためにはウッドファーストという考えをしっかりと浸透させ、木材需要を拡大するためのいろいろな取組と積み重ねを進めていく必要がある。

森林組合や事業者への期待は大きい。我々の大きな期待に対して、これからも御理解と御協力をお願いしたい。

(終了)